

令和7年度第1回みんなでライブラリー

「2025年本屋大賞受賞作家 阿部暁子さんトークイベント」講演録

令和7年8月30日（土）開催

◆味園史湖さん

皆さん、こんにちは。

本日は、令和7年度花巻市読書推進事業第1回みんなでライブラリー「2025年本屋大賞受賞作家阿部暁子さんトークイベント」へ、ようこそお越しくださいました。司会を務めさせていただきます、フリーアナウンサーの味園史湖と申します。
どうぞよろしくお願ひいたします。

暑い中、花巻市の文化会館へようこそお越しくださいました。

地元の花巻、そして岩手県内はもちろんですが、本日実は秋田県とか神奈川県とか、いろんなところからお客様にお越しいただいていると伺っております。

これからの一ひととき、みんなでライブラリーと一緒に楽しんでいきたいと思います。

開演に先立ちましてご案内を申し上げます。

本日のイベント中カメラ、スマートフォンなどの録音、写真、動画の撮影を固くお断りをしております。どうぞご協力をよろしくお願ひいたします。

それでは、お待たせいたしました。

本日のイベントのメインゲスト、お呼びいたします。

作家の阿部暁子さんです。

どうぞ皆さん大きな拍手でお迎えください。

【阿部暁子さん入場】

◆味園史湖さん

今日は始まる前から会場の客席、すごく熱気に包まれていて、舞台の袖にもすごく伝わってきてお

りました。

阿部暁子さんをお迎えし、これからお話を伺っていきます。

プログラムにも記載されております、阿部暁子さんのプロフィールをご紹介いたします。

阿部暁子さん

岩手県花巻市のご出身です。県内在住です。

2008年「屋上ボーグ」応募時のタイトルは「いつまでも」。この作品で第17回ロマン大賞を受賞してデビューされました。著書には、「どこよりも遠い場所にいる君へ」「また君と出会う未来のために」「バラ・スター＜side 百花＞」「バラ・スター＜side 宝良＞」「金環日蝕」「カラフル」などがあります。

2024年講談社から刊行されました「カフネ」で第8回未来屋小説大賞、そして第1回あの本、読みました？大賞を受賞。

そして今年4月に発表されました、2025年本屋大賞にて、阿部暁子さんの作品「カフネ」見事大賞を受賞されました。

本当におめでとうございます。

◆阿部暁子さん

ありがとうございます。



写真提供：講談社 料理イラスト：月音京子

◆味園史湖さん

本日お越しいただいている皆さんは既にご存知かとは思うのですが、今一度本屋大賞どんな賞なのかというのを簡単にご説明します。本屋大賞とは、全国の書店員が選んだ一番売りたい本 本屋大賞。オンライン書店も含む新刊書を扱う書店で働く書店員の投票だけで選ばれるという文学賞です。

過去1年の間、書店員自身が自分で読んで面白かった、お客様にも勧めたい、自分の店で売りたい、と思った本を選んで投票します。

全国各地の書店員の皆さんが、1次投票にて上位10作品のノミネート本を選びます。そして、その10作品を全て読んで2次投票を行います。

この2025年本屋大賞の発表が今年の4月に行われ、そしてこの2025年本屋大賞に阿部暁子さんの「カフネ」がダントツの1位で決まりました。本当に改めておめでとうございます。

◆阿部暁子さん

ありがとうございます。

◆味園史湖さん

すでにいろいろなところで聞かれている質問かもしれないのですが、本屋大賞を受賞した瞬間、どんなことを感じましたか？

◆阿部暁子さん

思ってもみなかったので、驚きすぎて頭が真っ白という感じでした。

◆味園史湖さん

何か受賞後に心境の変化とか、生活の変化とかありましたか？

◆阿部暁子さん

受賞当時は実感が全く湧かなかったんですが、いろんな方からおめでとうございますと言っていただけで、少しずつ実感が湧いてきました。後になってから担当の編集さんや営業さんがすごく尽力してくださいっていたということを知って、私の名前で一応受賞ということにはなっているのですが、本当にたくさんの方のおかげで実現したことなんだなど、すごくありがとうございます。

◆味園史湖さん

睡眠時間とかそういう生活の変化はありましたか？結構お忙しくされているのではないかと思うのですが。

◆阿部暁子さん

生活自体はあまり変わっていないのですが、今まで漫然と使っていた時間を、もっと効率的に使っていかなきゃいけないなという感じにはなってきました。

令和7年度花巻市読書推進事業 第1回花巻市みんなでライブラリー

2025年本屋大賞受賞作家

阿部暁子さんトークイベント

司会 味園 史湖さん

ゲスト 阿部 暁子さん

◆味園史湖さん

さて、本屋大賞や「カフネ」については、後ほど伺いますので皆さんご安心ください。

今日は「みんなでライブラリー」というイベントですので、まずは阿部さんが図書館をこれまでどのように使ってこられたのかという、読書の思い出などからお伺いしたいと思います。花巻のご出身ということですが、花巻の図書館には来ていましたか。

◆阿部暁子さん

ショッちゅう、小学生の頃から花巻図書館さんに通って本を読んだり借りたりしていました。それから、石鳥谷の方にイベントで伺ったこともあって、その時に石鳥谷図書館さんを覗いていつたりもしました。

◆味園史湖さん

市内に4つ図書館があるのですが、花巻図書館と石鳥谷図書館は国道4号線から行きやすい場所にありますね。それぞれ気に入ったポイントとかはありましたか。

◆阿部暁子さん

花巻図書館さんは本当に小さな頃から利用しているので、ほっとする感じの、なんだかホームみたいな場所です。石鳥谷図書館さんは企画ごとのディスプレイがあって、かっこいいな、面白いなと思って見ていました。

◆味園史湖さん

これは図書館員の方が聞かれて、すごく喜ばれるのではないかかなと思います。図書館によって、いろいろ個性が違いますもんね。

花巻図書館、小さい頃からということですが、どんな思い出がありますか？

お好きだったコーナーはありますか？

◆阿部暁子さん

そうですね、小さい時は児童書のコーナーに入り浸っていたんですが、少し足を伸ばして大人の本のコーナーに行った時に、意味はわからないけれど、かっこいいタイトルの本などがあって、そういうのを見て面白そうとわくわくしながら本棚の間を歩いた思い出があります。

◆味園史湖さん

知らなかった本に出会える場所、発見する場所み

たいな感じもあったのでしょうか。

◆阿部暁子さん

書店さんは、どんどん出てくる本をお客さんに出会えるように陳列していくべきやいけないので、古い本は棚から下げざるを得ないのですが、図書館さんは、どれだけ年を重ねた本でも書架にちゃんとしまって置いてくれるので、気になる本がある時に、蔵書があれば出していただいて読めるというのはすごく魅力的だなと思います。

◆味園史湖さん

阿部さんにとって図書館はどういう場所でしょうか。

◆阿部暁子さん

自分のお金で本を買えない子どもの頃に読みたい本を読める環境が、そばにあったことがすごく嬉しかったです。

あと、自分の本棚には限りがあるんですよね。どうしても置けない本がある。でも図書館ならば、どれだけ年月を重ねても、今まで出版されてきた本を代わりに保管し、提供してくれるので、頼もしい存在だなと思います。

◆味園史湖さん

そうですよね。昔の本を、見つけたり出会ったりすることができる場所もありますよね。

さて花巻といえば、詩人・作家の宮沢賢治の出身の場所でもあるのですが、賢治さんの作品でお好きなものはありますか？

◆阿部暁子さん

小学生の頃、教室の本棚に「注文の多い料理店」が並べてあって、私も、他の同級生の子たちもみんな大好きで、やっぱり面白いんですね。体にクリームを塗ったり、最後食べられそうになっちゃ

ったり。

他にも「よだかの星」を、小さい頃に読んだんですが、あれだけ悲しくて綺麗なお話というのを読んだのは初めてだったので衝撃を受けました。

「銀河鉄道の夜」は小学校高学年から中学生くらいの時に読んだんですが、1週間くらい立ち直れないほど、なかなか衝撃を受けましたね。

◆味園史湖さん

確かにどこか怖いような雰囲気もあり、すごく美しくもあり、いろいろ考えさせられる作品ですね。

ちなみに、賢治さんの作品の中で気になる登場人物とか好きな登場人物はいますか？

◆阿部暁子さん

「銀河鉄道の話」のカンパネルラって、あれだけ魅力的な人物なのに、内面をほとんど語られないんですね。だから彼の心の内を知っている人が物語の世界の中にどれだけいたんだろうなと思ったことがあって、そういう意味ですごく気になる人物ですね。

◆味園史湖さん

ここからは阿部さんの、地元ならではなお話などを聞きていきたいのですが、花巻や岩手の風景で好きな場所はありますか？

◆阿部暁子さん

いろいろあるんですけど、天気のいい日に岩手山が見えるとすごく綺麗で好きだなって思います。

◆味園史湖さん

岩手山は迫力ありますよね。

元気をくれる岩手の食べ物、花巻の食べ物はありますか？

◆阿部暁子さん

「よだかの星」というお菓子があるんですけど、ごまの入ったかりん糖に黒糖が塗ってあって、美味しいんですよね。

◆味園史湖さん

手のひらより大きいですよね。

◆阿部暁子さん

でも、軽く一人で1袋食べられるんです。名前も見た目も美しいんですね。作中のよだかを想わせてくれるような。でも、食べると黒糖の部分が奥歯にくっつく。それを取りながら食べていると、割と嫌なことがあっても奥歯についたあが取れる頃には、忘れてる。という効果がありますね。

◆味園史湖さん

いろんな意味で癒してくれるお菓子ですね。ご自分が岩手の人間だなって感じる瞬間ってありますか？

◆阿部暁子さん

都会に出た時、知らない人に声をかけるまでにすごく時間がかかるんです。そんな時に、シャイな東北人だなって思います。東北人とかあまり関係ないかもしれないんですけど。

◆味園史湖さん

今、会場には共感を持って頷いていた方もいらっしゃったような気がします。

お答えいただいた「よだかの星」とか、岩手山とかが、今後の作品に出てきたら、今日いらした皆さんにはページをめくって、あ、あの時の話の！なんていう瞬間が今後あるかもしれませんね。

さて、ここからは、阿部さんのこれまでの読書についてお話を伺いたいなと思います。

たくさん読書をしてきていると思うのですが、こ

これまで読まれてきた中で、特に好きな作家や作品を教えてください。

◆阿部暁子さん

森 絵都さんという直木賞も取られた作家さんがすごく好きです。森 絵都さんの「つきのふね」という、中学生が主人公の物語が本当に好きで。自分がどんな小説を書きたいかよく分からなくなったり時に読み返すと、ああ、そうだ、私こういう話を書きたかったんだって思い出すことのできる作品です。

◆味園史湖さん

大事な作家さんの作品ということですね。

◆阿部暁子さん

はい。

◆味園史湖さん

小さい頃から図書館にもいらしていたということですが、小さい頃に読んだ作品で印象に残っている作品とか、夢中になった作品にはどんなものがありますか？

◆阿部暁子さん

「クレヨン王国」シリーズという話があるんですが、「クレヨン王国の十二か月」とか、小さい頃はああいう話を夢中になって読んでいました。

◆味園史湖さん

学生の頃に出会った忘れられない作品はありますか。

◆阿部暁子さん

本屋大賞第1回受賞作である「博士の愛した数式」という小説があるんですが、大学に入ったばかりの頃に読みました。その時には既に小説家になりたいなという気持ちはあったので、小説ってここ

までできるんだな、という衝撃をすごく受けました。とにかく感動した作品でした。

◆味園史湖さん

小川洋子さん「博士の愛した数式」本屋大賞の第1回の受賞作ということで、大先輩の作品ですね。その後もいろいろと出会っていると思うのですが、大人になってから出会った本で印象に残っている作品はありますか？

◆阿部暁子さん

上橋菜穂子さんの「精霊の守り人」という作品を読んで、こことは違う世界の話なのに、まるでそこに人も世界もあるかのようにすごく緻密な描写をされているんです。そこに衝撃を受けたりしました。

あと、大沢在昌さんの「新宿鮫」っていうシリーズがあるんですけど、主人公の刑事鮫島が本当にかっこよくて、彼が事件に遭遇する毎回のドラマも面白くて、夢中になって読みました。

◆味園史湖さん

ずいぶん振り幅がありますね。

◆阿部暁子さん

そうですね。その振り幅が小説の面白いところだと思います。

◆味園史湖さん

確かにそうですよね。

たくさんの読書の中でご自身がすごく影響を受けたなと感じている作品はありますか。

◆阿部暁子さん

吉本ばななさんの「キッチン」という作品を読んだ時に、なんて自由な言葉の使い方をするんだろうというふうにびっくりしたんです。この作品から影響を受けていると思います。

あと、「ハウルの動く城」という宮崎駿監督がアニメ映画化した作品の原作の話を書いたダイアナ・ワイン・ジョーンズさんというイギリスの作家さんがいらっしゃるんですが、その人の書く話はとにかく人が可愛い。ハウルもダメダメ男なんですけど、可愛いしかっこいい。描かれる人物のキュートさをすごく学びましたね。こんな感じの愛しい人達を描きたみなと思わされた、すごく影響を受けた作家さんです。

◆味園史湖さん

今、ジブリの宮崎駿監督のお名前がちょっと出ましたが、ジブリ作品はお好きですか。

◆阿部暁子さん

ジブリは大好き。保育園に通っている頃から金曜ロードショーでジブリをやるときは絶対に観ていました。

◆味園史湖さん

特にお好きな作品は？

◆阿部暁子さん

語り出すと長くなってしまうんですけど、「もののけ姫」は映画館で公開された時に親に頼み込んで4回観にいったくらい、すごく好きです。あとナウシカも好きです。今日はちょっとナウシカっぽい服装を意識して選んできました。

◆味園史湖さん

今日のお洋服、ナウシカ風なのですね

◆阿部暁子さん

青くなった後のナウシカです。

◆味園史湖さん

ジブリ作品がお好きだというのが、すごく伝わってきました。

今注目されている作家さんはいらっしゃいますか？

◆阿部暁子さん

外国の作家さんなんですが、フェルディナント・フォン・シーラッハという人がいて、すごく淡々とした描写で物語を描く作家さんです。犯罪を題材にした物語を書かれるんですけど、今ここにいる人たちがいつそちらの世界にいてもおかしくない感じのような、すごく緻密な書き方をするので、すごく気になって、もっと読んでみたいなと思っている作家さんです。

◆味園史湖さん

日本語に翻訳されたものは出ていますか。

◆阿部暁子さん

あります。

◆味園史湖さん

手に入るということですね。

さっきジブリ映画の話もありましたけど、小説以外でも好きなジャンルとか読まれるジャンルというのありますか？

◆阿部暁子さん

映画もすごく好きでよく見ますし、漫画も大好きです。

◆味園史湖さん

漫画はちなみにどういうものが好きですか？

◆阿部暁子さん

家にあった「エースをねらえ！」とか「ベルサイユのばら」で育ってきたので、そういう少女漫画大好きです。家には「美味しんぼ」とかもあったので読みました。

あと、最近は池辺葵さんという漫画家さんがいらっしゃるんですけど、その人の作品は発売日をチェックして読んでいます。この辺の書店では発売日の次の日にしか入荷されないので、発売日の次の日に書店さんに行って買っています。

◆味園史湖さん

「ベルばら」「エースをねらえ！」そして「美味しんぼ」というのはリアルタイムの世代ではなく、もう少し上の世代ですよね。でも触れる機会があったのですね。

◆阿部暁子さん

そうですね、今でも家に全巻あります。

◆味園史湖さん

この中で好きなキャラクターはいますか？

◆阿部暁子さん

私は「エースをねらえ！」だと、宗方コーチが好きで、「ベルばら」だと、昔はフェルゼンが好きだったんですけど、今は重くてもアンドレが一番いいと思っています。

◆味園史湖さん

やっぱり自分の年齢で感じるものが変わったりしますよね。

さて、ここからは小説家としての阿部暁子さんについて、さらにお話を伺っていきたいと思います。小説家になりたいと思ったきっかけを教えてください。

◆阿部暁子さん

小説を書き始めたのは高校生の頃だったんですが、「なりたいな」という気持ちはありつつも、そういう一握りの人しかなれないものを目指すのはちょっとよろしくないなと思っていたんです。

高校生3年生の時、高校総合文化祭というイベントに参加して、小説で賞をもらいました。その時にすごく嬉しくて、私、小説家になりたいんだなと確認したのはこの時ですね。

◆味園史湖さん

「カフネ」以外の作品、例えば室町時代が舞台の歴史物とか、パラスポーツを扱ったものとか、離島の高校が舞台の切ない不思議な物語とか、いろんなものを書かれていますが、作品のアイデアはどんな時に浮かんでくるのでしょうか。

◆阿部暁子さん

野菜を刻んでいる時とか、本屋さんに寄った帰りにぼーっと歩いている時とか、そういう時に浮かんできます。不思議なことに小説を書こうとしている時は全く小説のアイデアって思いつかないんですよ。

◆味園史湖さん

何か違うことをしている時や、無心になっている時の方が思いつくのですね。

◆阿部暁子さん

そうですね。

◆味園史湖さん

どんな感じで浮かぶのですか。

◆阿部暁子さん

何かが結びつくんです。今まで頭の中にあったものと、その辺にあったものが、ぴっと結びつく瞬間がある。

◆味園史湖さん

名前からとか、ストーリーからとか、何からくるのですか。

◆阿部暁子さん

例えばなんんですけど、「パラ・スター」という車いすテニスの話を書いた時は、たまたまパラリンピックに出た経験のあるスポーツ経験者の方のお話を聞く機会があって、その内容がすごく面白く、その話を書いてみたいという風に思いついたんです。こんなふうに外から何か刺激を受けて、ときめいた時に物語が生まれるという感じですね。

◆味園史湖さん

ときめいて化学反応みたいなものが起きるのでしょうか。色々なところでそういう出会いがあるのですね。

執筆される際、スイッチを入れるためにまずこれをやります、というルーティンはありますか？

◆阿部暁子さん

パソコンのスイッチを入れますね。

◆味園史湖さん

まずはパソコンのスイッチを入れる。執筆の時の必須道具はパソコンと、それ以外には何かありますか？

◆阿部暁子さん

執筆用のメガネ。眼鏡をかけてパソコンの前で腕組みをして、1、2時間は何もしないままということがよくあります。

◆味園史湖さん

きっとその中で頭の中ではきっと何かがうごめいていたりするのでしょうか。

◆阿部暁子さん

気がつくとネットショッピングしちゃってます。

◆味園史湖さん

笑い声が聞こえてきましたけれども、会場にも身に覚えのある方が結構いらっしゃいますね。集中される時間ってどのように作っていますか？

◆阿部暁子さん

集中できるのを待っていると1日が終わってしまうので、とりあえず9時から始めて5時に終わると決めて、なるべく集中するように自分に言い聞かせています。

◆味園史湖さん

ご自宅で執筆される時は机の前にいるのですね？

◆阿部暁子さん

なるべくそうしています。

◆味園史湖さん

ご自身で意識されているということですね。

少し聞きにくい質問ですが、執筆が止まるということはありますか。

◆阿部暁子さん

執筆は基本止まっています。止まっているんですけど、締め切りが近づいてきて、「あ、まずい」ってなると書き出します。全ての作家さんがそうじゃないと思いますよ。

◆味園史湖さん

ケースバイケースかもしれませんのが、編集の方のお顔が浮かんだりとか、そういうこともあったりしますか。

◆阿部暁子さん

そうですね。督促メールがたり、打ち合わせの時にさらっと「どうですか？」と聞かれて「あっ！」となったりすることがあります。

◆味園史湖さん

執筆が止まってしまっている時、どのように気分転換されていますか？

◆阿部暁子さん

気分転換に本を読んでいます。ほかの作家さんの小説を読んだり、自分がそれまでに書いたものを読み返して「なかなか面白いんじゃないかな」と思って、続きを書き始めたりとかします。

◆味園史湖さん

一日の執筆時間を決めているということでしたが、何か動くための助走として書く枚数やノルマを決めるることはしていますか。

◆阿部暁子さん

していた時もあったんですが、できないということが分かったのでやめました。

◆味園史湖さん

色々と試しながら書かれいらっしゃるということですね。

阿部さんの作品に出てくるキャラクターは、個性豊かな方々が多く、セリフのやり取りもすごく生き生きしていて、彼らの姿が目に浮かぶような作品が多いなというふうに私は印象を受けているのですが、キャラクターはどのように生み出すのでしょうか？

モデルはいらっしゃるのでしょうか。

◆阿部暁子さん

モデルは基本いないんです。

卵が先か鶏が先かみたいな感じなんですが、ストーリーと人物の性格や行動というのは、結構共鳴し合っているので、こんな話を書きたいって思った時に、それと一緒に登場人物もストーリーと共に育っていくという感じです。

◆味園史湖さん

中には阿部さんのお人柄が投影されているというような方も、もしかしたらいたりするのでしょうか。

◆阿部暁子さん

例えば「カフネ」に出てくる薫子はなかなか偏屈な性格ですが、あれは私に似ていると思う。

◆味園史湖さん

お話を伺っている雰囲気とは違うような気もしますが、共鳴している部分があるのですね。ご自分とは全く異なる性格の人物を書く時には、思考パターンとか行動とかってどんなふうに生み出すのですか？

◆阿部暁子さん

私が割と言葉を飲み込みがちなので、思ったことをバシバシ言う人間を書く時は、もう自分がこうだったら良いなっていうことを「いいぞ、やれやれ」という感じで書きますね。

逆に自分と似ている人物を書くのよりも、まるで違う人物を書く方が、筆が乗るというか、進むというか、楽しいです。

◆味園史湖さん

これまでの阿部さんの作品の中で気に入っている登場人物はいらっしゃいますでしょうか？

◆阿部暁子さん

オレンジ文庫で「どこよりも遠い場所にいる君へ」という話を書いたんですが、その中にすごく偏屈で人間嫌いな「高津 椿」という男性が出てくるんです。その頃ちょっと私生活でも色々あって、人間なんてって、斜に構えた気持ちでいた時なんです。その気持ちを引き受けてくれた人物なので、気に入っています。この人嫌いだけど割と情に厚いみたいなところも書いていて楽しかったですね。

◆味園史湖さん

「どこよりも遠い場所にいる君へ」の中で出てくるアーティストですよね。由緒正しき家に生まれて育って、ちょっと口が悪い、でも実は優しくて主人公たちを助けてくれる大人、そんなキャラクターです。そんなふうに何かを引き受けてくれるようなキャラクターが他にもいたりするのですか？

◆阿部暁子さん

多かれ少なかれ、その時に自分が書く小説のキャラクターというのは、自分的一部分を担っているような部分があると思います。

◆味園史湖さん

これから「どこよりも遠い場所にいる君へ」をお読みになられる方や、すでにお持ちの方もいらっしゃると思うのですが、ぜひ読み返していただいて、もしくは「カフェ」でも、このキャラクターはもしかしてそうなのかなとか、新たな発見を楽しむことができるんじゃないかと期待してしまいます。

これまで、たくさんの作品を書かれてきていらっしゃいますが、これまで大変だったことも、色々あったのではないかなと思います。伺ってもよいことがあったら教えてください。

◆阿部暁子さん

私はデビューしてからしばらく売れる作品を書けなかったので、一時期小説家を辞めてしまおうと思うところまで行ってたんです。それが今思い返すと一番苦しい時期だったかもしれないですね。

でも、何かと周りの人から続けるチャンスをいただいて、少しづつ書く気持ちを取り戻してこれたので、今は続けてこれて良かったなと思います。

◆味園史湖さん

それまでに書いてきた作品を見てお声掛けしてくださった方がいたということですね。ちゃんと繋がってきていたのですね。

反対に嬉しかったことはありますか。

◆阿部暁子さん

今の話にも繋がるんですが、読者に求められるものが書けず小説が書けなくなってしまった時期に、自分が駄目なんだなと思っていたものを読んでくれた人から、「面白かったので一緒に仕事をしてみませんか？」と声を掛けてくださったこと也有って、それはすごく嬉しかったし、ありがとうございました。

◆味園史湖さん

作家活動の転換点になるような作品というと、どの作品になりますか？

◆阿部暁子さん

先ほどの話で、声をかけていただいて書き始めたのが、「室町縹乱」という室町時代の話なんです。あれが、「もうどうせ辞めるなら好き勝手に書こう」と思って、吹っ切れて書いたので楽しく書けた。思い出深い話です。

◆味園史湖さん

「室町縹乱」と言えば、足利義満や觀阿弥と世阿弥が出てくる作品ですね。時代小説ながら会話がコミカルで読みやすい作品ですので、ぜひ皆さんに読んでいただければと思います。枷みたいなものが外れて伸び伸びと書けた作品ということでしょうか。

◆阿部暁子さん

この作品を書いた時に「私、物語の中で人物が生き生きと動いているのが好きなんだな」というこ

とが実感できました。それ以降はできるだけ、登場人物にのびのびとその世界の中で生きられるような環境を作っていくうと思いつながら作品についています。

◆味園史湖さん

図書館は書店と違って本を売って応援するということはできないのですが、先程も、阿部さんのお話にもありましたように、書店に並ばなくなつた昔の著作でも、市民の皆さんにご提供して、いつでも作品と読者をつなげることができる。それが魅力でもあり、強みかなと思います。

「カフネ」で初めて阿部暁子さんの作品を読まれたという方、それ以外の作品もいろいろ読んでいますよという方も結構いらっしゃると思うんですけど、

「カフネ」で初めて阿部暁子さんの作品を読まれた方に、ご自分の今までの作品で「次に読むならこれ」という作品、どんなふうにおすすめされますか？

◆阿部暁子さん

そうですね。爽やかで明るい話がお好きだったら「どこよりも遠い場所にいる君へ」、「カラフル」「パラ・スター」とかがいいかもしれないし、「室町縕乱」は歴史小説って言っていいのかよくわかんないくらい自由に書いてしまったのですが、そういうオレサマ将軍が活躍する時代小説が好きだったら「室町縕乱」いいと思いますし、ミステリっぽいティエストがお好きだったら、「金環日蝕」がいいかなと思います。

◆味園史湖さん

これから次に何を読もうかなという時に参考にしていただければと思います。

読書について、著作についてなどをたくさんお伺いしました。

会場の皆さんも結構うなずきながら微笑んだり、笑ったりしながら共感していただいているなという感じがいたしました。ここで15分間の休憩をいただきます。

そして、後半いよいよ「カフネ」についてもお話を伺っていきます。

【休憩】

◆味園史湖さん

ではこれから後半2部を進めたいと思いますが、本日のイベントに合わせて、阿部暁子さんの2025年本屋大賞受賞作品「カフネ」を出版された講談社の編集部から、河北壮平さんと川原桜さん、お二方に花巻へお越しいただいております。東京から、ようこそお越しくださいました。

せっかくの機会ですので、「カフネ」の初代担当編集をされていた河北さんに代表してステージ上にご登壇いただいて、「カフネ」と阿部暁子さんについてお話を伺いたいと思います。

河北さん、どうぞステージへとお進みください。

【河北さん登壇】



写真提供：講談社

◆味園史湖さん

改めましてご紹介いたします。

「カフネ」の初代担当編集者で、現在は講談社文芸第二出版部部長の河北壮平さんです。よろしくお願いします。

◆河北壮平さん

よろしくお願いします。

◆味園史湖さん

会場の皆さんには本屋大賞をとった「カフネ」お読みになって、本日はご参加いただいているかとは思うのですが、改めてここで作品のあらすじをご紹介します。

「カフネ」は2024年5月に講談社から刊行されました。

最愛の弟が急死した。姉の野宮薫子は、遺志に従い弟の元恋人の小野寺せつなと会うことになる。その場で倒れた薫子を家に送り届けたせつなが振る舞ったのは、それまでの彼女の態度からは想像もしなかったような温かい手料理だった。

二人の「家事代行」が出会う人びとの暮らしを整え、そして心を救っていく。

河北さん「カフネ」の本屋大賞受賞を発表された時、どんなお気持ちでした？

◆河北壮平さん

もうなんとも言えないですよね。本屋大賞。

せっかくなのでここでしか皆さんがあまり知らないような話をお話しをすると、本屋大賞の事務局というところから、阿部さんに直接ではなくて編集部に内示の電話がかかってくるんですよ。その事務局の書店員さんから「河北さん」「あ、電話がかかってきた。どっちだ（※本屋大賞2025年には河北さんのいる第二出版部から2作品ノミネートされていました）」と思って聞いたら、「『カフネ』が受賞だよ。やったね」って言われて、腰が抜けるかと思いますよね。

その日ちょうど、とある文学賞の選考会があって、その選考委員の皆さんと某ホテルで会食していたんですけど、まあ正直、大御所の選考委員の事が、カボチャとかニンジンに見えてくるぐらい、動転はしましたね。

◆味園史湖さん

ここからは少しお二人にお任せしまして、「カフネ」の魅力について、そして舞台裏のお話などは私たちが普段触れる機会がない部分ですので、色々とお話をいただければと思います。

◆河北壮平さん

言っちゃいけないことをいっぱい喋りましょうか。

◆阿部暁子さん

その辺を歩けなくなるとちょっと困るので。

◆河北壮平さん

そうですね。

◆阿部暁子さん

ギリギリなところを攻めてお話しましょう。

◆河北壮平さん

編集者は原稿を依頼するのが仕事なので、一番初めに阿部さんとお仕事をしたいなと思って連絡を取ったのは、遡ってみると 2018 年の 5 月くらいなので、もう 7 年以上前になるんです。

◆阿部暁子さん

お互い若かったんですね。

◆河北壮平さん

もうちょっと若かったです。

それから実際に「カフネ」の仕事が始まるまでに、阿部さんも手元のお仕事があったので、3 年、4 年ぐらいあって、実際に動き始めたのが 2021、2 年ぐらいからですかね。

◆阿部暁子さん

その前は構想自体はあったんですけど、本格始動を始めたのがその頃でした。

◆味園史湖さん

ちょうどコロナ禍の頃と重なる感じですかね。

◆阿部暁子さん

そう、ど真ん中でした。

◆河北壮平さん

オンラインのミーティングで阿部さんと僕ともう一人現場の担当編集がいたんですけども、だいたい 3 人でキャッキャキャッキャしながら。すごい楽しい打ち合わせを重ねているうちに、「カフネ」の原型が出てきた。阿部さんに一番初めに僕が提案したのは、「この時代に簡単に名付けることができない、ラベリングのできない関係性」みたいなものを書いてほしいっていうことを思いついてご依頼したのです。

その中で「最愛の弟が急死して、その元恋人とお姉ちゃんの関係性がどうだろう」って言ったときに、阿部さんがキランってした感じがしました。それは書けそうな気がしましたね。

◆阿部暁子さん

何かこう、死んだ男性の姉と彼の元恋人っていう、その一文だけで、「あ、ドラマがある。」って。ちょっとプロジェクト X みたいな感じがした。

◆河北壮平さん

その作家さんにピンと来る提案ができた時っていうのは、編集者としての仕事の醍醐味の一つでもあって「あ、これ今阿部さんにハマっている。」と思った。そこから阿部さんにプロットっていう、いわゆるあらすじのようなものを作っていただくのに、それも結構かかりました。

◆阿部暁子さん

ちょっと時間がかかったんですけど。ちなみに一番最初に作ったプロットは、人生に挫けた 41 歳バツイチの薫子とさすらいの料理人せつながおんぼろワゴン車に乗って、依頼者の元に行く。明るいロードムービーみたいな感じの話を想定していました。だけど、世の中がコロナ禍であれよあれよというように閉塞感に覆われていってしまって。今書くとしたら、楽しいロードムービーではないんだな。ということになって、徐々に徐々に形を

変えていって今の「カフネ」の話になっていきました。

◆河北壮平さん

徐々に形を変えてっていうのがすごく重要なかなと思っていて。小説って「脱稿」と言って、作家さんが原稿を一度上げてから、数ヶ月直したりして、本になるまで半年くらい平氣でかかったりするんです。阿部さんとは「カフネ」の原稿を1年近くずっと直し続けてた気がします。

◆阿部暁子さん

編集さんに言われて直すところもあるし、編集さんに言われて直すと自分で読み返して、またさらにここを直すとしたら、そもそもそこからも違うんじゃないかなっていう風に、どんどん原稿が様変わりしてくるんですよね。その様変わりしていく内容というのも、私もやっぱり今を生きる一人の人間なので、ニュースで新型コロナウイルスの感染者数がまた増えているとか、自分の住んでいる身近なところの飲食店が休んじゃってるとか、みんなマスクして息苦しそうだとか、そういうのを見聞きして、その肌感覚がすごくストーリーに染み込んでいって、変わっていったとこがありますね。

◆河北壮平さん

ファイル名ってありますよね。阿部さんの原稿もファイル名が、1稿目、2稿目みたいな感じでバージョンいくつって書かれてるんですよ。編集者は、ここを直したらどうでしょうって改稿を依頼するのも仕事なんですね。阿部さんって、例えばバージョン3に修正依頼を出して「わかりました。なるほど。それはいいですね。変えてみます。」って戻ってきた時にバージョン7とかに数字が上がっているんですよ。

◆阿部暁子さん
どんどん上がってきました。

◆河北壮平さん

iPhoneとかWINDOWSとかのアップデートがあまりにも頻繁にあるみたいに、この間に何が起こっているのかなと思っていて。最終的に「カフネ」はバージョンいくつくらいまで行ったんでしょうね？

◆阿部暁子さん
20近く行きました。

◆河北壮平さん

レベルどんどん上がりましたよね。20近くまで行って、今度こそ脱稿して入稿するとなって、本作りに今度こそ入る。そこまで半年以上かけて改稿した上で、「著者校」という著者がその原稿をチェックするタイミングもあるんですけど、そこでもさらに鉛筆と赤を入れまくって改稿をしてましたよね。ここ、心折れそうにならないですか？

◆阿部暁子さん

私、指摘を入れられれば入れられるほど燃えるタイプなんです。「ここ何々では？」とか、「ここおかしくないですか？」とか書かれると「あー燃える」ってなって、なんか、どんどん赤ペンが滑っていく感じです。

◆河北壮平さん

出版社には校閲という部門があって、原稿の内容とかを精査する、指摘を入れる部署があるんですけど、すごいんですね。校閲の指摘とかって。この料理は何分ではできないのでは？とか。

◆阿部暁子さん

この人物のこの描写はこの位置関係だと成り立たないんじゃないですか。とか、あとは現実の法

令に照らし合わせるとこの描写この記述は間違っています。とか。私がほとばしる情熱に任せて書いたものを、編集さんが直してくれるんですけど、やっぱり編集さんもまだほとばしる情熱を持っているので、そこをすごく冷静に、現実的に、間違いや違和感がないかという点検をしてくれるのが校閲さん。今、心折れませんか？と言われたのは、その校閲さんから入る指摘はやっぱり厳しかったりもするんです。でも、赤の他人の私が書いた小説、言ってしまえば小説って小説家の妄想の塊みたいなところもあるので、それに対して自分の持てる知力、情報力全てを賭けて、綺麗に磨きあげるために指摘を入れてくれる。非常にありがたい存在です。なので、校閲さんの鉛筆が入れば入るほど「燃える」

◆河北壮平さん

これはどこかのインタビューで僕も話しているんですけど、最後もうこれでほぼ校了。最後のチェックでおしまいです。という時に読み直していて、あんなに直してきたにもかかわらず、エピローグに近い最後の方の描写でどうしても引っかかるところができてきましたんですよ。

今更言うなっていう感じなんですが、最初に言ったように、二人の「言葉にできない、定義できない関係性」を書こうとしているのに、今の形だと僕らがそれをわかりやすく定義しようとしているんじゃないかな。ということが気になり始めてしまった。

現場の担当編集がもう一人いたんですけども、そいつと相談して「これ、今から阿部さんに修正依頼を出したら、さすがにもう怒るんじゃないかな」と思いながらも、これはどうしても気になるから、ちょっとでも良くなるんだったら阿部さんに言ってみよう、と。

オンラインのミーティングで「阿部さん、ごめんなさい、お詫びがあるんですけど、この部分が気

になるんです」と言って、阿部さんを見たら、「あー」と言うんです。ヤバい怒る、と思っていたら、「やっぱりそこか」って言ったんですよ。「そこ私もいつか突かれるんじゃないかと思っていました。直しましょう」って言うんですよ。

そういうことすると別の作家さんだと怒られたりもするんです。ギリギリに直したら事故の元にもなるので。それでも阿部さんが最後の最後までこだわって、直してくださったことが、それこそ本屋大賞という大きな結果につながったんじゃないかなと思ったりはします。

◆阿部暁子さん

恐縮です。でも、今は河北さん側の話なんですけど、私の側からお話をすると、そこまで作業が進んでいて、私の改稿作業が入った時にどっちが苦労するかっていうと、明らかに出版社側の人なんですね。それでもなお、ここをやっぱり直した方が良くないかって言ってくれたことは、すごくありがとうございます。もしかしたら編集者によつては、読めないこともないし、大丈夫じゃないか、と流してしまったかもしれない。それくらい小さいことだったんです。小さい修正ではあったんですけど、でもそれがあるのとないとでは、内容が大違いになってしまうところだったので、本当に最後の最後で、大変ではあったんですけど、直せてよかったです。言ってもらえて良かったなって思っている。記憶に残る一つのエピソードですね。

◆河北壮平さん

こうやっていろんな打ち合わせをしながら、侃々諤々喧々囂々やっていますけど

◆阿部暁子さん

画面越しにつかみ合う勢いでやっているんですけど

◆河北壮平さん

阿部さんとの打ち合わせはすごく前向きだったの
で、ずっと楽しかったですね。

◆阿部暁子さん

ありがとうございます。私はいつ催促されるのか
ってドキドキしていました。

◆河北壮平さん

催促はずっとしてましてたので、7年間。催促し続
けてやっと上がった原稿ですから。

原稿が上がった後に本になるくらいから現場の担
当編集と話していたんですが、「カフネ」って昨今
珍しい「読むとちょっと世界が良くなる小説」だ
と思っているんですよ。

阿部さんはコロナ禍でどうしても暗い世相の中で、
この小説を書いていた。そんな時に書いたからこ
そ、どこまでも優しい小説だと思っていた。自分
らしく生きるとか、自分のために生きることって、
すごくもちろん今大事なことなんだと思うんです。
でも、自分勝手に生きることと、自分らしく生き
ることというのはちょっと違うんだなと思っていた
。せつなと薫子の関係性というのは、あなたの
ために生きたっていいじゃないというような物語
だと思うんですよね。

それが阿部さんの作品の中に溢れている優しさな
のかなと思う。読み終わると人に優しくなれる小
説ってあんまりないし、すごいことなんじゃない
かなと思う。褒めてるんですよ。

◆阿部暁子さん

めちゃくちゃ褒めてくれる。今ちょっとドキドキ
します。ありがとうございます。

◆河北壮平さん

自分だけの宝物になる本っていうのも、すごくたく
さんあると思うんですよ。本棚にずっと置いて
おきたいなっていう本もあると思うんですけど、

「カフネ」って「For you」「誰かのための、あなたのための」物語って僕ら講談社は言っていて。
何が言いたいかというと、すでに1冊お持ちの方
も、このあと会場の外で物販もあり、サイン本も
あるので、誰かにプレゼントする本というのも素
敵なんじゃないかなということが言いたいんですけど

◆阿部暁子さん

突然の宣伝すみません。

◆河北壮平さん

この後、僕、登壇が終わったら物販コーナーにお
りますし、ひょっとしたら阿部さんも立ち寄って
くれるような気がするので、皆さんその節はぜひ
お願いします。

◆阿部暁子さん

宣伝ばっかりすみません。

◆味園史湖さん

お話を伺っていて、1部で阿部さんから作品が生
まれる時にいろんな化学反応という話があったの
ですが、編集者と作家さんの組み合わせもやはり
化学反応というか、組み合わせで生まれるものって
違うのかなと思ったのですが、いかがでしょうか。

◆阿部暁子さん

敏腕編集者である河北さんがどうかはわからない
んですけど、例えば「どこよりも遠い場所にいる
君へ」の時は、担当編集さんの「さわやかジュブナ
イル」が読みたいですよねっていう一言から、あ
あいう話が生まれたので、編集さんとの会話とか、
その編集さんが目指している仕事の内容とかって
いうのは、結構自分に跳ね返って、化学反応を起
こして、作品を作っていることはよくあります。

◆味園史湖さん

河北さんは、いかがですか？

◆河北壮平さん

まさに薫子とせつなみたいなもので、唯一無二だと思うんですよね。僕と、僕の現場の後輩と阿部さんだからできた物語だったと思う。もちろん阿部さんじゃなければこの話は生まれないんで当然なんですけど、そこで生まれる化学反応とか核融合みたいなものは常にある。

誰と組むか、どんな話をするかっていうので、その都度変わっていく感じはしますね。

◆味園史湖さん

その結果「カフネ」が生まれて、最後のギリギリまで直しが入って、それを私たちが手元で読んでいるということになるわけですね。

◆阿部暁子さん

そうですね。

これは私も本当に後になってから知ったんですけど、私は原稿を上げて、はいこれで作業完了です。お疲れ様でした。と言われた後からは、ほぼタッチしてないんです。だけど、そこから、営業さんはすごく力を入れて各所に売り込んでくださったり、現場の担当さんが帯に付ける言葉を一生懸命考えててくれていたり、そういう出版社の皆さんが尽力させていたということを、発売直前の4月になって初めて知ったので、ありがたくも面白かった。

その4月に関係者みんなでご飯を食べた会があったんですが、私の目の前でその営業さんと現場の編集さんが、熱いやり取りというか、「おい、ちょっと今だから言うけど、最初の帯の言葉がちょっと出来すぎだったんじゃないかな」と、目の前で言い合いを始めてしまって。そんなことがあったんだ、そうだったんだってそれで初めて知れて面白かったです。

◆河北壮平さん

ありましたね

◆阿部暁子さん

本っていうのは映画のエンドロールに流れる名前くらい多くの人が関わっているんだなっていうのを初めて知りましたね。

◆味園史湖さん

「カフネ」に出てくる料理のレシピが、書店によっては持って帰れるようになっていますよね。本にプラスアルファの楽しみなどが、結構あったような気がします。

◆河北壮平さん

あのレシピは、現担当の川原さんや宣伝のスタッフと一緒に色々作っていましたね。

◆味園史湖さん

本だけじゃなくてレシピも見て、すごくワクワクしました。そういう楽しみもすごくあったなって。

◆河北壮平さん

実際作ってみたくもありますし。

◆味園史湖さん

そうですよね。

◆河北壮平さん

もう一つ、ちょっとお話ししたいこといいですか

◆味園史湖さん

ぜひ

◆河北壮平さん

いい本って続きが読みたくなるじゃないですか。続きがね。「カフネ」が上がった頃から、薫子とせつなとの物語だったり、せつなとの過去の物語だった

り、もう少し読みたいなっていうことを阿部さんにずっとお話しておりまして、最近僕の顔を見てくれなくなっていたんですよ。あまりにも催促しそうで。ただ、今回久しぶりに直接会うからだと思うんですけど、イベントの2日、3日前に「カフネ」の спинオフ原稿が届きました。

◆阿部暁子さん

顔を合わせて催促されたくなかったんです。それがどうしても嫌だったので2日前に送りました。

◆河北壮平さん

それを、今の現場の担当編集の川原が先に読んでくれたんですけど、僕のところに来て「河北さん上がりましたよ。むちゃくちゃいいです。3、4回泣きました」って言って。それを阿部さんに今日伝えたら「川原さん涙もろいから」なんて言って。いやいや、僕も読んだら本当に素晴らしい原稿でした。

今回の原稿は短編なので、どこかで短編集のような形でまとめられるかなと思うんですけども、「カフネ」の外側にあるお話というのがもうちょっと読めるかもしれないなと思っているので、これからまた殴り合いの改稿、

◆阿部暁子さん

血で血を洗う改稿。

◆河北壮平さん

していきます。どんなお話なんですか。スピノフは。

◆阿部暁子さん

カレーを作る話です。

◆河北壮平さん

料理の中身の話じゃなかったんだけど、カレーがおいしそうな話ではありましたね。

◆阿部暁子さん

そうですね。「カフネ」の本編は薫子とせつなが主人公ですが、そのスピノフの短編は「カフネ」の1年前の話で、せつなと晴彦がカレーを作る話です。

◆味園史湖さん

いつごろ読めるんでしょう。すごく楽しみですね。何かワクワクします。

◆河北壮平さん

この後の殴り合いの結果次第ですけど、早ければ年内には「小説現代」という雑誌に載ります。

◆阿部暁子さん

それは早いんじゃないですか。

◆河北壮平さん

他の作品との相談次第ですけども、早ければ来年早々ぐらいに、短編集とかが出せたらいいなと。皆さんの前で言質を取ろうかなと思ったりしました。

◆味園史湖さん

みなさん「小説現代」要チェックですね。楽しみにしています

お二人がお話している時に、血で血を洗うなんて言葉もありましたけれど、客席にいらっしゃる川原さんも含めて、壇上にすごく温かい空気が流れていると感じました。

私からもお伺いしたいのですが、河北さんから見て、作家阿部暁子さんはどのような方でしょうか。

◆河北壮平さん

いい方向と悪い方向で話しますね。悪い方向から先に行くと、いじるととても面白い人。だが、最近

いじり返されるのが楽しい人。で、いい方向でいうとほぼ一緒なんんですけど、実は打ち合わせするのがものすごく楽しいチャーミングな作家さんですね。打ち合わせって気が重いこともあるんですけど、今日は阿部さんと「カフネ」の打ち合わせかと思うと、楽しくなっちゃって。最初10分ぐらいキャッキャキャッキャして、いい加減始めますか？と言って打ち合わせを始めるような素敵な方です。

◆味園史湖さん

出来上がった本の周りまで温かいような気がします。

阿部さんから見て、河北さん、川原さん、講談社の皆さんには、どんな存在ですか？

◆阿部暁子さん

河北さんは先程のエピソードでも象徴されていると思うんですが、編集者としてすごく優秀な慧眼の持ち主。その慧眼から逃れられない、みたいな感じのところがあるので、本当に作品作りでは心強い存在です。

イジってくるのがイラっとすることはたまにあるんですけど、「僕、思ってもないことをスラスラそれなりに言えちゃうところが何か自分で嫌なんですね。」って、中二みたいなところが小説の主人公にしたら映える面白い人だなと思います。

川原さんは、勤勉、優しい、面白い。長所を上げ始めるときりがないんですけど、これから組んで作品を作っていくのが楽しみな編集者さんです。

編集者だけではなく、先程お話に出た営業さんのほか、本が出るまでに映画のエンドロールのようにたくさんの方が関わって下さっていて、心強い人達ですね。

◆味園史湖さん

関係もバージョンアップしていっている感じがしますね。楽しい現場の雰囲気が伝わってきました。

もっとたくさんお話を伺いたいところなんですけれども、この辺りでお時間となってしまいました。

河北さん、裏話もたくさんしていただきまして、本を読むときに受け取れる想いなどが更に豊かになつた感じがします。作品の魅力についても貴重なお話をいただきまして、本当にありがとうございました。登壇者の河北壮平さんでした。どうもありがとうございました。

【河北壮平さん退場】

舞台裏のお話を伺っていると、販売されている本が長い時間をかけて直しや工夫をたくさん積み重ねた結果を、私たちが手に取っているのだなと、そんなことを感じました。

今日のトークイベントの開催発表と同時に、阿部暁子さんへの質問を募集してきました。皆さんから様々な質問が届いておりまして、全部で48通も集まっています。お申し込みいただきました質問には皆さんのが熱いメッセージもたくさん入っておりましたので、全て阿部暁子さんにお渡ししております。

では、ここからは皆さんに事前にいただきました質問をもとに阿部さんにお伺いしていきます。

1つ目「美智子」さんからの質問です。

「本屋大賞受賞おめでとうございます。
『室町繚乱』の一文に「あんまりきれいで、少し、かなしいわね。」「そうだね。人はみな、少しかなしいよ」とありました。私はその一文を読んで、『こういう一文に出会うために、もうずっと本を読んでいるんだ!』と、とても感銘を受けました。こういう心が震える文章はどのように思いつくのでしょうか?」

◆阿部暁子さん

ありがとうございます。今のは登場人物の会話なんんですけど、その登場人物だったらどう考えるか、どういう言葉を選ぶかということを一生懸命その人物に寄り添って考えた時に、いい台詞って出てくるなと思います。

◆味園史湖さん

これからも阿部さんの震える文章にたくさん出会っていただければと思います。

2つ目の質問は「チームカフネに入りたい。戦闘服は茶色のエプロン」さんからの質問です。

「書店員をしています。本屋大賞受賞後に花巻の皆さんのが嬉しそうに「カフネ」を手にとられるのを間近で感じ、自分のことのように嬉しく、買ってくださる皆さんと握手したい気持ちを抑えて仕事をしています。

主人公の薫子の人柄が好きすぎて「誠実な努力家で、まっとうにへこたれては不屈のレスラーみたいに立ち上がる人」そんなふうに私もなりたいと思っています。

阿部さんがこうなりたい、こうありたいという理想がありましたら教えていただきたいです。
今日は遠目でもお会いできることを楽しみにしています。」

と、いただきました。

◆阿部暁子さん

私なかなかポンコツなので、すぐにかっとイラッとしてしまうし、すぐに凹んでしまうんですが、やっぱり傷ついたり凹んだりっていうことからは逃げられないと思うんです。それこそ薫子のように凹むんだけど、落ち込むんだけど、立ち上がり続けられる人間になりたいなと思います。

◆味園史湖さん

続いて「ゆり」さんからの質問です。ちょっと長めに書いていただいていたので、抜粋してご紹介します。

「阿部さんの作品中に描かれる場所の描写が、魅力的だと思っています。私の実家は横須賀なのですが、「鎌倉香房メモリーズ」では行ったことのある様々な場所が見てきたように事細かにリアなところも書かれています。知っていたはずの場所なのに、瑞々しく新しく感じられて、また阿部さんの言葉をなぞるように鎌倉を歩きたくなっています。阿部さんはそこに住んでいらっしゃったことがおありでしょうか?どんな風にその土地を取材されて、どんなところに注目して、言葉を紡いでいらっしゃるんだろうかと伺いたいです。」

◆阿部暁子さん

ありがとうございます。鎌倉には、住んだことはないんです。なので、書いている時に取材のため

に1泊したりします。土日で行ったりしたりするので、時間があんまり取れないんですけど。そんなに褒めてもらって恐縮です。

取材に行った時は、人がたくさん住んでいそうな住宅地や、その土地の人達が使うスーパーや書店さんに行って、こういうところで住んでるんだな、って分かるような、その街の生活に根ざした場所を実際に見たり歩いたりするように心がけてます。楽しんでもらえる出来になっていてよかったです。

◆味園史湖さん

「鎌倉香房メモリーズ」はお香や香りで謎を解決する物語ですね。「カフネ」の八王子もすごくリアルだな、と思いましたが、生活が感じられる場所とかをいろいろな取材して作品に活かされているんですね。

さあ、続きまして、「タッキー」さんからの質問です。

「作品の登場人物の名前の決め方は、どのようにして決めるのですか？カフネの場合は？」

◆阿部暁子さん

これは「カフネ」だけではなくて全般的になんですが、大まかに人物のイメージがあるんです。「ちょっと口うるさい真面目な人」とか「無愛想で口が悪いけど、本当は情に熱い人」という構想のイメージから、なんとなく音を連想して考えていきます。念のためにネットで姓名判断をして、あまり画数が悪いとその登場人物に申し訳ないので、フルネームを決めてから姓名判断をして、ちょっと大変そうだけど、そこそこ大丈夫そうって思つてつけたりします。

◆味園史湖さん

「せつな」という名前も、珍しいですもんね。

◆阿部暁子さん

そうですね。ちょっと珍しいです。

◆味園史湖さん

姓名判断までされているというのは作者の愛を感じますね。

次は「ピンクトパーズ」さんからの質問です。

「阿部暁子さんはにかんだ笑顔がみていてほっこりしてとても好きです。「フフフッ」と静かに笑うような勝手なイメージなんですが、爆笑することってありますか？」

人生で一番笑ったな、みたいなエピソードがあれば知りたいです。」

◆阿部暁子さん

爆笑は、毎日していると思います。

◆味園史湖さん

どんな時に？

◆阿部暁子さん

わりとこう、どんな時だろう。家族の変な寝相を見た時とかですかね。あと、カラスが道路にクルミを置いて、車に轢かせて食べようとしているんですね。あれを見て、楽しくて笑っちゃったりとかしますね。

◆味園史湖さん

日常いろんなところに笑いの種が落ちている感じですね。

◆阿部暁子さん

そうですね、そうなります。

◆味園史湖さん

次は「くうちゃん」さんからの質問です。

「本を書き続けるために日頃から実践している事はなんですか？」

◆阿部暁子さん

前半の方でもお話をしたんですけど、割と関係のないことをやってたり、ぼーっとしている時に「あ、これだ！」ってアイデアが出てきたりするので、それは即座にスマホで書き留めていたりします。あと、寝入りばなに夢をばんやり見た時に「これだ！」って思ったりすることもあるので、スマホにメモを取るんですけど、その寝入りばなの時に取ったメモを後で見返すと「砂漠で鍋焼きうどん食べる」って書いてあったりして。よくわかんないないなってなったりもするんですけど、続けています。

◆味園史湖さん

常にアンテナをちゃんと張ってらっしゃるっていう感じがしますね。

「砂漠で鍋焼きうどん」のお話も、そのうち生まれるかもしれませんね。

次は「すずベル」さんからの質問です。

「言葉の紡ぎ方が素敵です。語彙力の豊かさはどう育まれたのですか。」

◆阿部暁子さん

「美味しいんぼ」かな？小学生の時によく漢字が書けるって褒められたんですけど、多分あれはルビを振ってない「美味しいんぼ」を読んで育ったからだと思います。

◆味園史湖さん

小さい時から身边に美味しいものの気配があったんですね。

続いて「T.T」さんからの質問です。これが最後の質問になります。

「作家になっていなかったら、何の職業に就いていましたか？」

◆阿部暁子さん

きっと職を転々としながら、さすらいの人生を送っていたんじゃないかなと思います。人がたくさんいる中で生活を続けるっていうのが苦手な子どもだったので、きっとさすらいの旅人になっていたと思います。

◆味園史湖さん

作家という天職に巡りあえたのかな、という感じがしますね。

他にも、たくさん質問をお預かりしておりますが、残念ながらお時間となってしまいました。

皆さん、本当にたくさんの質問をありがとうございました。

今日は市内、県内、県外もいろんな所からここ花巻へお越しくださいました皆さんにメッセージをお願いします。

◆阿部暁子さん

今日は暑い中お運びいただきまして、本当にありがとうございました。話すのがあまり得意ではないので、面白かったかどうか自信ないんですが、楽しんでいただけたなら本当に嬉しいです。ありがとうございます。

【拍手】

◆味園史湖さん

拍手が物語っていますね。

◆阿部暁子さん

恐縮です。

◆味園史湖さん

本日はお忙しい中、トークイベントにご登壇いただきまして、本当にありがとうございました。作

家の阿部暁子さんに色々話を伺いました。本当に名残惜しいのですが、阿部さんのお話はここまでとさせていただきます。どうもありがとうございました。皆さん、どうぞ阿部さんを拍手でお送りください。作家の阿部暁子さんでした。

【阿部暁子さん退場】

本日はトークイベントへのご参加、誠にありがとうございました。今日の様子は市のホームページなどでご報告を予定しております。

そして、先ほど素敵なニュースが入ってきました。NHKのEテレで「グレーテルのかまど」という番組がありますね。

「カフネ」の物語に出てくるローズチョコパフェを取り上げられるそうです。放送日は9月1日月曜日、NHK Eテレ午後10時からの放送となっていきます。どうぞご覧ください。

ここで図書館より今年度のみんなでライブラリーの事業についてご案内があります。

◆八重樫係長

花巻図書館の八重樫です。

花巻市立図書館では、令和7年度花巻市読書推進事業として第2回みんなでライブラリーと題して、皆さまからおススメ本の情報を募集しております。花巻市内の4つの図書館に、皆さまのオススメ本のタイトル、著者名、おすすめの理由などを書いていただくカードと回収ボックスを用意しておりますので、図書館にご来館の際はぜひご記入をお願いいたします。

書いていただいたカードは12月3日から3月1日まで、各図書館で所蔵している本と一緒に展示する予定です。

本日登壇いただきました阿部暁子さん、講談社の河北さん、川原さん、司会の味園さんからもおス

スメ本のカードをお寄せいただく予定です。良い本を教え合う良い機会となりますので、たくさんのおススメ情報をお待ちしております。花巻市立図書館からでした。

◆味園史湖さん

ぜひご協力をよろしくお願いします。

本日はご参加誠にありがとうございました。お忘れ物などございませんよう、今一度お手回り品をお確かめの上、少し暗いので階段の上り下りなど足元にもどうぞお気をつけてお帰りください。これにて第1回みんなでライブラリー「2025年本屋大賞受賞作家阿部暁子さんトークイベント」を終了いたします。

本日はありがとうございました。

【終演】